

---

## 【特集】 アメリカの構造的差別を問う——歴史とその実態 (1)

---

### 特集にあたって

南 修平

---

2020年5月25日、ミネソタ州ミネアポリスにおいて偽札を使ったという容疑で警察官に拘束されたジョージ・フロイドは、無抵抗にもかかわらず、うつぶせの状態では警察官に首と背中を9分29秒もの間押さえつけられ、無残にも殺害された。事件は未だに強い衝撃を残したままである。一連の様子を記録した動画は、フロイドが「息ができないよ、お母さん！」と叫び続けているのを気にもかけず、ポケットに手を突っ込みながら膝頭でフロイドを押さえ続ける警察官デレク・ショーヴィンを映し出す。時に威圧的にカメラに目をやるショーヴィンはあたかもその行為を誇示するかの如くである。映像はショッキングであり、あまりに痛ましい。

このことを契機に、全米、そして世界で、Black Lives Matter (以下、BLM) の運動が拡がり、今も抗議の声が止むことはない。抗議に立つ人々は、警察官によるフロイドの殺害が決して特殊なケースではなく、それがアメリカ合衆国における長い人種差別の歴史の延長線上にあることを強く訴えている (世界に拡大した抗議の声は、その死をヨーロッパ植民地主義による人種差別的暴力の文脈に位置づけてもいる)。その中で盛んに強調されるのは、差別が社会のシステムとして構造化し、差別が秩序となって機能している実態 (体) である。フロイドのケースで言えば、殺害したのはショーヴィンであるが、それは彼個人の責任だけでなく、こうした警官を生み出し、各地に抱え、不当な暴力や暴言が横行する日常がずっと続き、今までも同様の犠牲者が数多く生み出されている構造こそ問題だということである (ただし、ショーヴィンは2017年に14歳の黒人少年を携帯していた懐中電灯で殴り倒し、17分間も地面に押し付けるなど、公式記録だけで18回も苦情が寄せられている札付きの暴力警察官ではあったが)。命が危険にさらされ、それが理不尽に奪われる日常に対して抗議の声は常にあったにもかかわらず、アメリカ社会の多数派はそれに無関心であるだけでなく、人種差別的暴力に支えられた社会システムの中で安寧な暮らしを享受してきた。理不尽な暴力は決して自分たち多数派に向けられることはないという安心に満ちた前提とともに。

本特集の目的は、BLMの運動が高揚する中でようやく関心が集まり始めた、アメリカ社会における制度的 (institutional) な差別を様々な角度から検証し、それが構造化 (structural) ・体系化 (systemic) されてきた歴史とその実態を明らかにすることにある。先述したように、警察官による人種偏見に基づいたあからさまな暴力 (police brutality) は、今に始まったものではなく。例えば第二次世界大戦後の1948年8月、「人種差別のない街」ボストンでは、「アメリカ国民」として軍に従軍し、退役後タクシー・ドライバーをしていた黒人男性が、警官に口答えをただけで警察署に連行され、激しく殴打されて顎を砕かれたのに化膿するまで放置されるという事件が報じ

られている<sup>(1)</sup>。この記事に掲載した黒人紙『シカゴ・ディフェンダー』の見出しは「ボストンで相次ぐ大量逮捕、警察暴力（police brutality）の大波押し寄せる／帰還兵、顎を砕かれ、警察官、恐怖支配を発動」とあり<sup>(2)</sup>、この頃には黒人たちの間で police brutality という用語が流通していることが確認できる。これが「奴隷解放運動の拠点」であり、他州に先駆けて差別を容認しないリベラルな法律を立法してきた北部マサチューセッツ州の州都ボストンに生きる黒人の日常であった。

マーティン・ルーサー・キングも警察暴力に対して度々激しい怒りを表している。「私には夢がある」とのフレーズで有名な首都ワシントン DC での演説もその一つである。キングは同じ演説の中で「私は黒人がたとえようのないほど恐ろしい警察暴力（police brutality）の犠牲者である限り、決して満足することはありません」と憤りをあらわにしていた。警察の容赦ない暴力によって黒人は多くの犠牲を重ねている現状に我慢がならなかったからである。しかし、その怒りに注意が払われることはほとんど無く<sup>(3)</sup>、「夢がある」という清々しい文句だけが流通してきた。それは、まさに都合のいい部分だけが消費され、キングら多くの黒人が訴えていた切実な要求である警察暴力のストップは覆い隠され、放置され続けてきたことに他ならない。

この演説から 50 年近くが経っても、依然 police brutality という言葉を使い続けてその蛮行を告発せねばならない現状は、制度化された差別が社会に根付き、強固なシステムとして日常の中に居座っていることを示す。だからこそ、そうした構造を歴史的な視点で検証し、その実態を明らかにする必要がある。本特集の狙いはまさにこの点にある。

ただし、差別構造は警察暴力だけに現れるものではない。差別的な構造の中で暮らす者にとって、日々警察官の暴力に怯え、悩まされること以外にも、日常生活の中で、例えばどこかに住み（住宅）、そこで学ぶ（教育）時、社会の多数派は経験せずに済むような理不尽かつ不当な状況に直面しなければならないのである。

本特集ではアメリカ社会における構造的な差別の歴史と実態を明らかにするために、2 回にわたって様々な論考を読者に提供する。それらはいずれも、この問題を見ていくために不可欠となる視点を有している。アメリカの歴史に通底する社会に組み込まれた構造的な差別とはいかなるものか、問題意識を深めるには十分な力作を揃えられたと考えている。以下、今号（761 号）と次号（762 号）に掲載される論考を簡単に紹介しておきたい。

アメリカ社会において多数派を形成し、差別が構造化された中で常に権力関係の上位に立つのは白人である。しかし、歴史を振り返れば、「白人」の意味するところは単純ではない。19 世紀終わりから 20 世紀初頭にかけて大量にアメリカへ渡って来た「新移民」は、それよりも先にアメリカで暮らしていた「生粋の」白人たちから歓迎される存在ではなかった。中野耕太郎はその新移民と黒人の関係を考察し、両者の間にいかなる人種の差異が生まれ、それが差別的な関係へと発展していくかという、実証するには決して容易でない課題に対して、慎重かつ確実に迫っていく（761 号）。

日常生活を送るうえで「住む」ことが大きな部分を占めているのは間違いないであろう。その「住む」ことにおいて、差別は明確に構造化されてきた。武井寛は第二次世界大戦後のシカゴに焦

(1) 大森一輝「「この街には人種隔離などありません」——20 世紀前半のボストンにおける黒人コミュニティの分断と反差別論の混迷」『北海学園大学人文論集』第 64 号（2018 年）、105 頁。

(2) 同上、脚注 24。

(3) Olivia B. Waxman, “What Martin Luther King Jr. Said at the March on Washington About Police Brutality,” *TIME*, Aug. 27, 2020, accessed on Dec. 6, 2021, <https://time.com/5882308/march-on-washington-police-brutality/>.

点を当て、住宅における人種隔離のプロセスと実態を検証する。居住区を人種別に区画するゾーニングや特定のCATEGORYに属する人＝非白人を住居から排斥する制限的約款に対して違憲判決が下される1948年の連邦最高裁の事例を考察する武井は、日常生活の基本である「住む」ことにどれだけの困難が伴うのかを示す（761号）。

住むことと並んで学ぶこと（教育）も日常生活の中では欠かせない要素の一つである。南川文里は大学入学の判断基準をめぐる激しい論争の渦中にあるアファーマティヴ・アクション（以下、AA）に焦点を当てる。アメリカ社会ではマイノリティに属するアジア系がAA廃止を訴えて提訴した最新の事例を検証する南川は、AAに反対の声を上げるアジア系の主張が歴史的にいかなる変化を意味するかについて論じ、差別とは決して多数派VS少数派という単純な構図で描き切れない、きわめて複雑な問題であることを明らかにする（761号）。

土屋和代は戦後最大の黒人による蜂起が起こったロサンゼルス・ワッツ地区に注目し、そこに外（ビバリーヒルズ）からやってきたユダヤ系の映画人と地元の黒人たちが始めた詩作ワークショップを考察する。住むことと学ぶこと双方を視野に入れる土屋は、困難な環境の中で生きるワッツの黒人たちが詩作・表現活動を通じてオルタナティブな思想を紡いでいくのに対し、それに違和感を覚え、だんだんとそこから乖離していくユダヤ系映画人の姿から構造的差別の在り方を浮かび上がらせる（761号）。

構造的な差別のもとにあるのは黒人だけではない。野口久美子は先住民が数値的には黒人よりも劣悪な状況にあることを様々な資料から指摘しつつ、そうした実態が歴史的につくられてきた過程について、主として経済的側面に重きをおいて20世紀の連邦政府による先住民政策を考察する。そして、ニクソン政権以来構築されてきた連邦政府とのパートナーシップ体制を基軸とする先住民政策の功罪を問い、今も先住民の経済的貧困が生み出される原因を探り出す（762号）。

石山徳子は白人を中心に昨今顕著となっている自身の人種的アイデンティティを先住民に求めたがるレイス・シフト（以下、RS）に注目し、その典型例として民主党の指導的上院議員であるエリザベス・ウォーレンを批判的に考察する。石山は、ウォーレンを通じて見えてくるRSの意味するところとは、先住民の歴史や存在を無視した白人による一方的で特権的な選択であり、それこそがセトラー・コロニアリズム（入植植民地主義）の実践に他ならないと断じる。そしてそれに代わり得るものとして「ともになる（co-becoming）」という新たな概念を提唱する（762号）。

2016年の大統領選挙では米墨国境を越えてくるメキシコ人への対応が大きな争点の一つになった。戸田山祐はそもそもメキシコ人がアメリカに大量にやってくるきっかけとなったブラセロ計画の歴史を考察しつつ、同時期のメキシコ系アメリカ人による政治・労働運動にも注意を向ける。それらの分析を通じて戸田山は、非正規労働者としてのメキシコ人の流入が増大してくることにに対しメキシコ系アメリカ人がこれを排斥する動きを捉え、アメリカ社会で生きるメキシコ系アメリカ人の立ち位置からその原因を分析する。そして、移民に対する立場は常に情勢に左右される流動的側面を有しており、現在のアメリカに形成されている親移民的な政治連合も、実際には脆くて危ういことに注意を促す（762号）。

以上紹介したように、特集は2号にわたっていろいろな視点からアメリカにおける人種差別の歴史と現在を考察する。7本の論考はいずれもアメリカ社会における制度的・構造的な差別を歴史的に捉えることの重要性を示し、またそのことで今後の展望を探るきっかけとなることを企図するものである。読者の忌憚なき意見・批判を待ちたい。

（みなみ・しゅうへい 専修大学文学部准教授）